

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

14日(朝) No.10

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるように「シエーム・イエシュア」と呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 地に住む「生き物」①

● 前回では第五日の「水に住む生き物」(「ネフェシユ・ハツヤー」
הַיָּם וְהַצִּבְּרִים)を「**贖われた異邦人の民**」、「翼のある鳥」を「**イスラエルの残りの者**」として、それぞれを神が創造したことを学びました。そして今回、第六日に「地の生き物」(הַיָּבֵשָׁה וְהַצִּבְּרִים)が造られます。

24 神は仰せられた。「地は生き物を種類ごとに、家畜や、
這うもの、地の獣を種類ごとに生じよ。」すると、
そのようになった。

25 神は、地の獣を種類ごとに、家畜を種類ごとに、地面を這う
すべてのものを種類ごとに造られた。神はそれを良しと見ら
れた。

● 「地」に「生じよ(産み出せ)」(命令形ではなく「生じるように」という指示形)と神が語っています。彼らの存在目的は何でしょうか。

1. 地に住む「生き物」②

●24～25節に登場する新しい語彙は以下の通りです。

(1) 「**家畜**」 「ベヘーマー」 (בְּהֵמָה)。

(2) 「**這うもの**」 「レメス」 (שָׂמַר)

※水に群がりうごめく生き物の「うごめく」に「ラーマス」 (שָׂמַר) の分詞が使われていました。

(3) 「**地の獣**」 「ハイトー・エレッツ」 (חַיַּת אֶרֶץ)。

●これらに対して、神は「魚」や「鳥」のように「生めよ、増えよ、満ちよ」と命じて祝福してはいません。これはどういうことでしょうか。明らかに何かを語っていますが、答えは講義の最後に示されます。

1. 地に住む「生き物」③

●神は地に住むすべての生き物を造られました。その多くの動物はいったい何のために存在しているのでしょうか。

(答えは次頁)

●パウロは言いました。

「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです」(Ⅱコリント4:18)。また「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められる」(ローマ1:20)ともあります。「被造物」を「万物」と理解するなら、それらはいったい何を言おうとしているのでしょうか。

1. 地に住む「生き物」④

【新改訳2017】コロサイ人への手紙1章16～17節

- 16 なぜなら、天と地にある**すべてのもの**は、見えるものも
見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、
御子にあって造られたからです。**万物**は御子によって造られ、
御子のために造られました。
- 17 御子は**万物**に先立って存在し、
万物は御子にあって成り立っています。

※「成り立っています」を、回復訳は「まとまっています」と訳しています。
それは「御子にあって互いに結び合っている」ことを意味しています。

※「**すべてのもの**=**万物**」(All things)のギリシア語は「パース」(παῖς)ですが、
Hebrew語は「コール」(כֹּל)「コル」(כֹּל)「クツラーム」(כֹּלָם)が使われています。
「クツラーム」(כֹּלָם)は「コール」(כֹּל)の3人称複数です。

1. 地に住む「生き物」⑤

● 「神の、目に見えない性質、すなわち**神の永遠の力と神性は・・・被造物を通して知られる**」とは、

例えば、水、雲、風、火(=これらは御使いの表象でもあります)。太陽、月、星、食物、きつねと穴、鳥と巣、鳥、鳩、蟻、囀り、門、岩、石、種、ぶどう、いちじく、オリーブの木など・・・聖書において、**これらはすべてイエシュアを表わすたとえ**です。すべての被造物はイエシュアを表わすために存在しているとパウロは言っているのです。とするならば、キリストを知ることはなんと豊かで、奥深く、深遠で、計り知れないことかと思わされます。聖書にあるそうした表象を理解することは、キリストを知り、キリストのいのちを豊かに経験するために必要な知識と言えるのです。

1. 地に住む「生き物」⑥

●今回の「家畜」(牛、羊)は神に近づくためのいけにえ、つまりイエシュアを表わす「型」(本体の写し)です。ヨハネが見た天の御座の周りには「四つの生き物」がいます。それらはすべての「生き物」(ネフェシュ・ハツヤー)を代表しています。

【新改訳2017】ヨハネの黙示録 4章7節

第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。

●「獅子」「雄牛」「人間」「鷲」は何を表わしているのでしょうか。「四つの生き物」がひれ伏している方は「ほふられた子羊」(アルニオン/カヅ)です。四つの福音書—マタイは王の象徴「獅子」、マルコはしもべの象徴「牛」、ルカは人の象徴「人の子」、ヨハネは大祭司の象徴「鷲」—それぞれがキリストの特性を表わしています。

2. 「家畜」 (「ベヘーマー」 בְּהֵמָה) ①

- 「家畜」の中で最も重要な生き物は「羊」。初出箇所は以下です。

【新改訳2017】創世記4章4節

アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。

【主】はアベルとそのささげ物に目を留められた。

※ 「羊」 = 「羊の群れ」 (「ツォーン」 צֹאן)、
「初子」 (「ベホーラー」 בְּכוֹרָא)、
「肥えたもの」 = 「脂肪、最良のもの」 (「ヘーレヴ」 בֶּהֱלֵב)

- 主が「羊」に目を留められた理由は何でしょうか。聖書全体を俯瞰。

- ① 創世記22章「全焼のための子羊(אֶזְרָא)」、身代わりの雄羊(אֶזְרָא)
- ② レビ記11章「食べて良い生き物はひづめが分かれ、反芻するもの」
- ③ ヨハネの福音書1章29節「罪を取り除く神の子羊(אֶזְרָא)」
- ④ 黙示録5章12節「屠られた子羊(אֶזְרָא)は、力と富と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。」

2. 「家畜」 (「ベヘーマー」 בְּהֵמָה) ②

● 地の生き物としての「家畜」(「ベヘーマー」 בְּהֵמָה)の中でも、「牛と羊」はイスラエルにとってきわめて重要な生き物でした。なぜならそれは、人が神に近づくためになくてはならない神へのささげ物であり、**キリストを啓示するもの**であったからです。

● **イスラエルの民は神に近づくために、家畜を神に献げたのです。**ただしそれらを神として拝んだ場合には、偶像礼拝として神の怒りを招きました(詩篇106:19~23, 金の子牛)。

● 「家畜」の「**ろば**」は、キリストに対するイスラエルの民の状態を啓示しています。

【新改訳2017】マタイの福音書21章5節

「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。

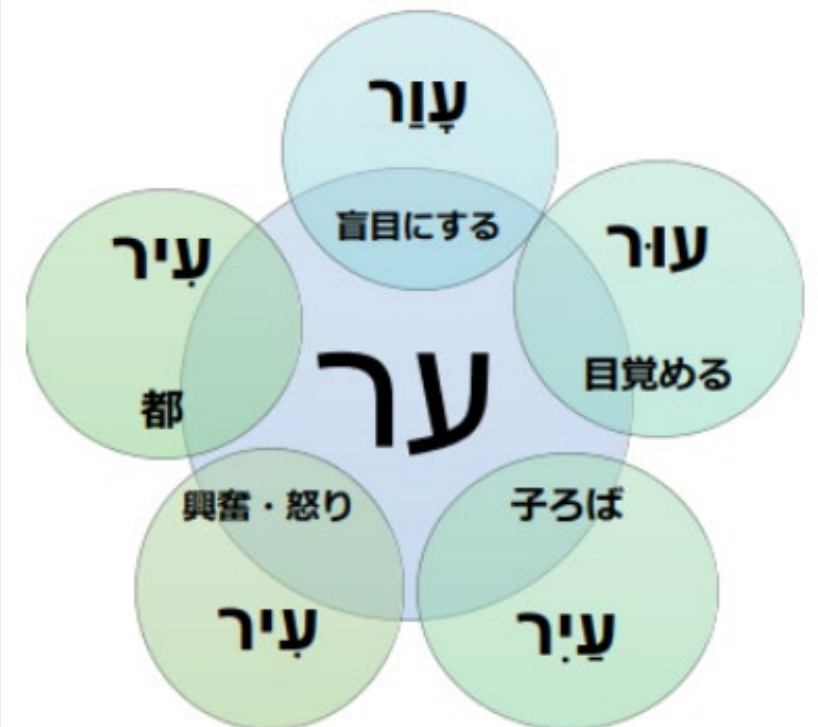
柔和な方で、**ろば**に乗って。荷ろばの子である、**子ろば**に乗って。』」

2. 「家畜」 (「ベヘマー」 בְּהֵמָה) ③

●なにゆえに「子ろば」なのでしょう。それは「子ろば」を意味するヘブル語の中に答えが隠されています(右下図参照)。「子ろば」は「アイル」(אֵיל)です。そしてこの動詞「ウール」(עוּר)には「目を覚ます」という意味がありますが、同子音の「アーヴァル」(עוֹר)には、その反対の「盲目にする」という意味があります。

図にはありませんが、名詞の「イッヴェール」(עֵוֶר)には「盲人、盲目」という意味があります。家畜の「子ろば」はイスラエルの民がキリストとどのような関係にあるかを啓示する重要な家畜となっているのです。共観福音書のすべてにその言及があります。

(マタイ21章2, 5, 7節。マルコ11章2, 4, 5, 7節。ルカ19章30, 33, 35節)



3. 「這うもの」(「レメス」 שָׁמַיִם)

- 【新改訳2017】創世記3章1節

さて蛇は、神である【主】が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。

※「蛇」(「ナーハーシュ」 שָׁמַיִם)

- エデンの園に現れた「蛇」は、人を惑わすサタンの化身です。イエシュアは律法学者、パリサイ人たちを「蛇よ、まむしの子孫よ」と言っています(マタイ23:33)。

- ヨエル書では「力強く、数えきれない国民」(1:6)の来襲がいなごの大軍にたとえられています。その国民はアッシリア、バビロン、ペルシア、ギリシア、ローマ、そして最後は反キリストによる勢力が考えられます。

4. 「地の獣」 (「ハイター・エレッ」 חַיְתָּוּאֲרֵרָא) ①

● 「地の獣」は、しばしば強大な諸国を表わしています。神はイスラエルの民を矯正するための道具として、それらの国々を用いられました。

● ダニエル書(7:3~8, 11, 12, 15~26)に登場する4頭の獣は以下の通り。最初は鷲の翼があったものの、後でそれを失って人間の特質を帯びた**獅子**。多くの肉をむさぼり食う**熊**。四つの翼と四つの頭を持つ**豹**。それに実際のどんな動物にも該当せず、際立って強く、大きな鉄の牙と10本の角があり、目と大言壮語する口のあるもう1本の角が生えてくる**第4の獣**。これらはイスラエルを支配してきた強国(**バビロン**、**メディア**・**ペルシア**、**ギリシア**、**ローマ**)を指しています。これらは神(キリスト)に敵対する国々です。Iペテロの手紙5章8節でも、悪魔が「食い尽くそうと探し回っている吼えたける**獅子**」にたとえられています。

4. 「地の獣」 (「ハイター・エレッツ」 חַיַּתָּה אֶרֶץ) ②

ダニエル書7章に登場する4頭の獣



バビロン



メディア・ペルシア



ギリシア



ローマ

- 「人手によらずに切り出された石」 (=メシア) によって、一瞬のうちに巨体な像が倒されるという夢。



4. 「地の獣」 (「ハイター・エレッツ」 חַיְתוֹת־אֶרֶץ) ③

● 「地の獣」の中に「**小犬**」(κυνάριον)がいます(マタイ15:26)。**小犬**は**異邦人**を表わしていますが、「**犬**」(κύων)は**割礼を受けた異邦人信者**のことを指しています。また、家畜の中で大きい「**らくだ**」が「針の穴を通るほうが、金持ちが神の国に入るよりも易しい」とたとえています(マタイ19:24)。

【新改訳2017】マタイの福音書25章31～33節

31 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。32 そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、33 羊を自分の右に、やぎを左に置きます。

● 「**羊とやぎ**」が、神の民イスラエルに対して異邦人がどう取り扱ったかの違いを表すものとして記されています。**羊**は祝福され、**やぎ**はのろわれています。

今回のまとめ

●創世記 1章24～25節にある「家畜」「這うもの」「地の獣」は文字通りに受け取ることできますが、神のご計画においてはそれは表面的な理解でしかありません。「御子(キリスト)」との関係においてどのような意味があるのかを考える時に、「家畜」はキリストをあかしすると同時に、「**神の民イスラエル**」を神に近づけるものとして存在しています。反対に「**這うもの**」と「**地の獣**」は、「**イスラエルに敵対する諸国民**」を表わしています。それらはイスラエルの民を矯正するために不可欠な存在ですが、神はそのことを「良しと見られた」のです。

●このように、地の生き物のすべてが御子(キリスト)を何らかの形であかししており、**御子のために存在している**と言えるのです。特に、コロサイ人への手紙1章16～17節には、神の目にはキリスト以外の何物も取るに足りないのだ、という事実が示されています。